

# 複合耐病性台木の育種研究から生まれたオリジナル・ブランドローズ

岐阜大学提供  
作成日 2016年 2月 17日  
更新日



研究者氏名  
ふくい ひろかず  
福井 博一

所属機関  
岐阜大学  
応用生物科学部

関連キーワード(複数可)

花き園芸学、耐病性育種、種間雑種、品種登録、商標登録、ブランドローズ

主な研究テーマ

- ・バラの根頭がんしゅ病と根腐病抵抗性に関する台木の育成に関する研究
- ・園芸植物の倍数性育種に関する研究
- ・栽培バラと四倍性ノイバラとの種間雑種の育成

主な採択課題

- ・基盤研究(B)平成20～23年度(配分総額:19,240千円)  
課題名「バラの根頭がんしゅ病と根腐病抵抗性形質に関連する遺伝子マーカーの決定」
- ・基盤研究(C)平成26～28年度(配分総額:4,680千円)  
課題名「バラ根頭がんしゅ病抵抗性台木の育成と抵抗性形質に関するDNA多型解析」

## ① 科研費による研究成果

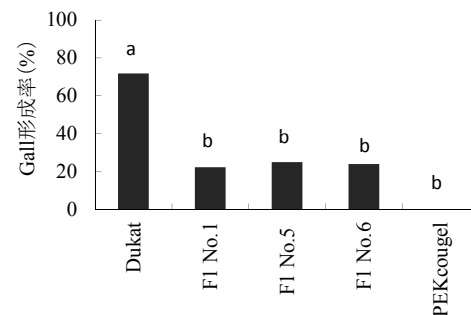
根腐病と根頭がんしゅ病はバラの根を犯す病害である。薬剤防除が困難で枯死や生育低下など甚大な被害を及ぼすことから、両病害に対する抵抗性品種の育成を目指した。抵抗性品種を接ぎ木苗の根に用いることで、切りバラの生産性の向上が期待される。

ノイバラは根腐病に抵抗性があり、バラ品種の“PEKcougel”が根頭がんしゅ病に抵抗性を持つことから、これらの交配後代から有望な系統を育成した。

- ・4,737個の交配種子から胚を摘出して胚培養を行った。
- ・交配種子のほとんどが本葉の展開後に枯死した。
- ・成熟胚直前の胚を培地上で発芽させ、6個体が生き残り、遺伝子マーカー検定で3個体の交配個体(F1)が得られた。
- ・これらのF1は両病害に対する高い抵抗性が確認できた。
- ・接木親和性検定の結果、‘F1-No.1’と‘F1-No.5’が有望であった。



胚培養後に順化した3個体



根頭がんしゅ病検定法(ex vitro浸漬検定法)によるF13個体とDukat及びPEKcougelのgall形成率

## ② 当初予想していなかった意外な展開

3個体のF1のうち、F1-No.1は根頭がんしゅ病・根腐病抵抗性台木として品種登録を行い(登録番号第24506号)、営利的なバラ生産で活用され始めた。しかし、F1-No.5とF1-No.6は今後の交配親として利用することとした。

2015年5月に株式会社レオマユニティーから「2016年のバラ園開設にあたり未登録のバラの譲渡依頼」を受けた。3個体のF1のうちピンク色で房咲きのF1-No.6を提案したところ、(株)レオマユニティーと岐阜大学との譲渡契約が成立し、「レオマローズ」の商標を取得してオリジナル・ローズとすることが決まり、2016年に品種登録することとなった。



F1-No.6

レオマローズのロゴとバラ園予想図

## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

根頭がんしゅ病及び根腐病に対する抵抗性形質の遺伝を明らかにするために、ノイバラとバラ品種の“PEKcougel”の交配を継続し、様々な系統を作り出している。これらの個体の中にはレオマローズと同様に鑑賞価値の高い個体が多数現れる可能性が高く、新たなガーデンローズ品種として品種登録が可能である。